

独の鷗外記念館 改修費用ピンチ



記念館は、鷗外の独留学から100年となる1984年、下宿先だったベルリンの建物に「記念室」として造られ、鷗外が通ったフンボルト大学が運営している。年間入場者は、ベルリンの壁崩壊（89年）後の数年間は6千人に上ったが、90年代半

経歴や作品紹介 30年ぶり一新へ

明治の文豪、森鷗外（1862～1922）が留学したドイツにある記念館が、常設展を30年ぶりに一新するため、改修を進めている。日本語の案内文も新たに作り、異文化との出会いや鷗外の多面性について紹介する内容に再構築する。ただ費用が足りず、支援を呼びかけている。



①ベルリンの鷗外記念館の外観
②鷗外の肖像を背にするベアータ・ボンデ副館長＝いずれも記念館提供

「日本からの支援に期待」

以降は3千人ほどになった。今年9月から、10年来の課題だった展示を一新し始めた。鷗外の経歴と作品を紹介するパネルや、複製のデスマスクなどが並んでいたが、新たな展示は「鷗外とベルリン」に焦点を据える。鷗外の伝説の手紙や留学時代の名刺など新資料も加え、来年3月に再開する予定だ。改修費用は5万円と見込んでおり、大学が4万円を負担するが、1万円（約120万円）が足りないという。

ベアータ・ボンデ副館長（62）はこの夏、鷗外の言葉が記されたカードを「北九州森鷗外記念会」に送った。

我をして九州の富人たらしめば、いかなることをか為すべき。芸術の守護と学問の助長とは、近くは同世の士民を利し、遠くは方來の裔孫を益す

鷗外が軍医として小倉（北九州市）に赴任中、「福岡日日新聞」に寄せた文章で、文化・芸術への投資を勧めたものだ。ボンデ副館長は「記念館は私の人生の仕事」と熱烈な調子で訴え、支援の依頼が日本語でつづられていた。

北九州のファン
寄付募集へ動く

北九州市にある鷗外旧居を運営し、鷗外や作品について「語る会」を毎月開くなど、熱心なファンが集まる北九州森鷗外記念会。鷗外ゆかりの団体と連携して寄付を募ることを決めた。浜田源一郎会長（79）は、鷗外と並ぶ文豪、夏目漱石のロンドンにある記念館が今年閉館したことも念頭に「ぜひ展示を充実させ、存続してほしい」と言う。

ボンデ副館長は「日本の近代化から学べることは多い。異なる文化との出会いは普遍的なテーマ」と記念館の意義を説く。「日本人の来客を想定して維持している記念館。日本からの好意的な協力を期待しています」と話す。

寄付の問い合わせは北九州森鷗外記念会（093・531・1604）へ。（奥村智司）